ひだご坊
No.273
2012年4月20日

発行　真宗大谷派 高山教務所
発行者　大町慶華
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地
☎(0577)32-0776
＊毎月20日発行　50,000部
三市一都無料配布
印刷　山都印刷株式会社

念じられ照らされて

であった言葉たち

関口真爾

〈略歴〉
一九七二年生まれ。
仙台教区仙台組徳泉寺副住職。
仙台教区仏教青年会会員。
被災地で念珠つくりや子どもの保養等の支援活動を行っている。

「あなたは瓦礫を毎日見てないから」

震災瓦礫処理に関して仲間と意見が分かれ「外の人にはわからない」

「僕は外のつもりはない」というやりとりの後で言われた言葉。たしかに同じ地域に住んでいるつもりでも状況は各々明らかに違う。違うから何もできないのではなくて、状況が同じじゃないからできることがあるし、別の視点が必要なこともある。だけどこの時、明確な立場の違いを突きつけられて「自分は誰なのか」「どこに立っているのか」を強く問われたように感じた。

二〇一一年三月一一日の東日本大震災の後、仲間たちとBOP（仏青お風呂プロジェクト）を立ち上げて仮設お風呂を持って避難所をまわった。

「ぼくんち、なくなっちゃった」

「一緒に走ってたのに、はぐれてしまった」

「この子の両親はもういねぇんだ」

「地元を見たくない」

「なんで・・・」

怒ったように語る人、呆然としたつぶやき、ぽつんとこぼれおちた言葉。どれに対しても私は頷くだけで何もできない。何もできなさすぎて泣けてくる。であったことの重さと悲しみの深さに愕然とした。

何かできないだろうか、何かしなくちゃいけないという焦りのようなものが自分の中に生まれたが、この時はかなりきつかった。私のできることはほんとに限られているし、

「しなくちゃ」と思っていると「しない自分」

「できない自分」がつらくなっていく。そして自分だけにとどまらず、周りの人にも同じ目を向けてしまう。

「帰っちゃうの？」

「また来るよね」

「実家だと思ってね。おかえり」

「はやく切り上げて飲むべぇ」

私にとって救いになったのは避難している人たちの言葉。ただ来てほしいとせがむ子どもたち。おかえりと言ってくれるお母さんたち。「飲むべぇ」と迎えてくれるお父さんたち。

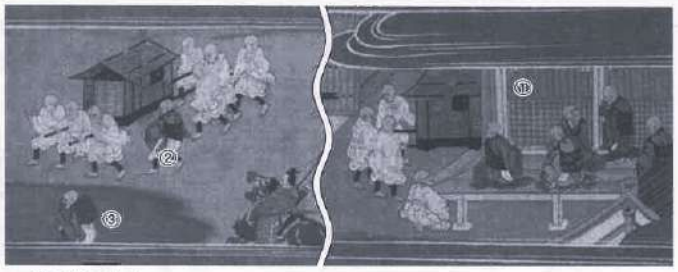
「しなくちゃ」から「会いたい」に変わった時、なんだかわからないしんどさが肩からおりた。

別に何もしなくても構わない。だけどまた会いたい。

「できないことを責められる役場職員の気持ちが痛いほどわかる」

この言葉に驚いた。なんでそんなに杓子定規なのか。いのちを最優先にできないのか。話を聞くことぐらいできるんじゃないか。そう思っている心に棘が刺さった。立場の中で動くしかない人がいて、職務や縛りの中で苦しんでいる。そのことを見落とさないでほしい。悲しみを忘れないでほしい、と。

震災後、あちこちで立場や状況の違いから衝突し、対立していく場面に出あってきた。その度に『阿弥陀経』に出てくる一つの体に二つの頭を持つ共命鳥のことが浮かぶ。共命鳥の二つの頭の様に私たちは常に状況や立場で分かれてしまうけれど、実は身体は一つの同じ命、同じ願いを生きている。どれほど思いを寄せても私の立つ場所は家庭であるし、自分の関わる寺だ。私の家族、私の町、私の知人。自分との距離でしか関心や問題意識を持つことはできないし、立場の違いはなくならないのかもしれない。だけど、だからといって諦めたくはない。ともに精一杯生きていきたいと、いのちがいきいきと生きられることを願う時、おなじ願いの大地に立ってその壁を超えていきたいと今、感じている。どんなにぶつかっても、道を違えても、願い、願われていることに違いはないはずである。



①岡崎の庵室。
板輿に聖人が乗られるところであるが、憚って姿が見えないように描く。
②乗観房西仏　③下間蓮位房
師資配流②「親鸞聖人配流」

絵解親鸞聖人絵伝 23

親鸞聖人絵伝下巻第一段「師資配流」

親鸞聖人には遠流の処断が下されました。法然上人の出京を送るのは忍びないとして、二日早い一二〇七（建永二）年三月十六日の早暁、東山南禅寺の北、岡崎の庵室を出て、配所の越後国府（新潟県上越市）へ向けて出立されました。お伴に蓮位房と西仏も従ったと伝えられています。

聖人は、この専修念仏弾圧を、後に『教行信証』の化身土巻に「主上臣下、法に背き義に違し、忿りを成し怨を結ぶ」と、朝廷の理不尽な処断に憤りをこめて認めておられます。

法然上人同様、聖人もこの時還俗させられ、善信房の名を剥奪されて藤井善信の俗名を付けられました。しかし、聖人は朝廷のこの処断を良しとせず、「僧に非ず俗に非ず」と、身分制を外れた者として、自ら「禿」の字を姓とし「愚禿」「愚禿釈親鸞」と名乗られるようになりました。改めて、唯仏弟子として釈尊の勧めを仰ぎ、阿弥陀如来の本願に生きる決意を表明された名告りです。

住職の言葉

打てば響く

朝日高根組　圓城寺
小倉喜信

私は農家の長男として生まれましたが、母の実家である圓城寺に後継者がいなくなってしまい、お寺に入ることになりました。月日が流れるのは早く、今年で住職拝命四十八年になります。僧侶になるために、中学校を転校し、お経や作法を学び、東本願寺で得度式を受けました。

この年（十三才）より、毎年夏に高山別院で開かれる飛騨学場に参加しました。その時親戚にあたる清見組蓮徳寺前々住職の故三本普正さんから聞いたことばが今でも脳裏から離れないのです。

「お寺では、毎朝「半鐘（喚鐘）」の音が聞こえるだろう。境内に植えてある庭木、竹など毎日その音を聞いて生きている。小鳥も同じである。その庭の木々で撞木を作ると良い音色が響きわたり、竹で笛を作るときれいな音色が出る。これはなぁ、お念仏の南無阿弥陀仏の声が庭の生きものに染み込んだからきれいな音色が出るんだ」と話されました。

『仏説無量寿経』「嘆仏偈」に「正覚の大音、響き十方に流る」とあり、そのさとりにもとづく自信あるみ声は、大きく響き十方にとどろきわたっております。

その響きがひとりでも多くの人に伝わることが大事であり、念仏者がひとりでも生まれんことを願い心を込めて「梵鐘や半鐘」を打つことが大切であると教えられたことが昨日のように思い出され、亡き人をしのんでいる今日この頃です。

☎テレホン法話（0577（34）2313）○4月21日～30日…櫻居和雅氏　○5月1日～10日…一本木国昭氏　○5月11日～20日…榎澄子氏
◇宗教トラブルFAX相談窓口（0577-32-0763）

『恵信尼消息』から見える親鸞像

京の覚信尼

井上　円

覚信尼については、『恵信尼消息』第二通に出てくる「わうこせん（王御前）」という名前が、その俗名であると言われている。古くは親鸞聖人が譲り状を書いて、照阿弥陀仏から東の女房に譲り渡された下人「いや女（弥女）」が、覚信尼であるとも理解されていたが、現在は別人であると解釈されている。この『消息』第四通の記述から逆算して、一二二四（貞応三・元仁一）年常陸の生まれで、「おとこ（末子）」（第八通）とあることにより、親鸞と恵信尼の間に生まれた末娘であることがわかる。

覚信尼が十一歳の一二三四（文暦一）年の頃、親鸞一家は京都へ移住する。その後、『日野一流系図』等には、覚信尼は「右兵衛督局」と称し、「堀河右大臣忠親家女房」として仕え、また「久我太政大臣通光公家女房」として仕えたともいう。この当時の女房は、妻という意味と主人に仕える女性という意味の二つがあったが、この場合は後者の意である。

一二四〇年前後（延応・仁治）頃、日野広綱と結婚し、覚恵（光寿御前・第十通）と光玉（宰相殿・第九通）の二人の子女をもうけている。広綱は、親鸞のいとこ信綱の子である。つまり覚信尼から言えば、祖父有範の長兄範綱の子が信綱で、その子が広綱であるから、覚信尼と広綱は、またいとこという関係になる。父信綱は、法名尊蓮の名を持ち、また広綱も宗綱の法名で出家し、父と共に親鸞聖人の門人となっているので、その親密さが伺われる。覚恵七歳の時にその広綱が死去した後、覚信尼母子は、親鸞一家に身を寄せたと言われている。

やがて一二六二（弘長二）年親鸞聖人が死去された後、小野宮禅念と再婚したようである。禅念は、小野宮少将具親の子で、初め少将阿闍梨と称したと言われる。源具親は、九条兼実の四男良輔の猶子となっているので、禅念は九条家に縁の人物と言えよう。『消息』第十通の「一昨年やらん生まれておわしまし候いしけるとうけ給わり候いし」の記述から、覚信尼と禅念との間に一二六六（文永三）年唯善（幼名一名丸）が生まれていることがわかる。覚信尼の出自に関連しているようである。

ところで、覚信尼が仕えた「久我太政大臣通光公」が気にかかる。久我通光は、九条兼実の政敵として知られる内大臣源通親の三男である。一一九六（建久七）年通親らの陰謀によって、兼実が関白と氏長者を罷免され、弟の慈円も、官職を辞して籠居したのは、建久七年の政変として有名である。その子通光は、後鳥羽天皇の乳母藤原範子の子として生まれたことで、嫡男となり、後鳥羽天皇の側近として順調に昇進し、一二一九（建保七）年内大臣となっている。一二二一（承久三）年の承久の乱の時、後鳥羽上皇の皇子雅成親王の義父であったために、鎌倉幕府から隠居を余儀なくされる。その後、一二三六（嘉禎二）年の遠島歌合に出詠するなど、隠岐に流された後鳥羽上皇と密かに連絡を取り合っていたと言われている。一二三九（延応一）年上皇が隠岐で死去した後、後嵯峨天皇の大叔父として権勢を振るい、一二四六（寛元四）年太政大臣に任ぜられた。父親鸞を遠流に処した後鳥羽上皇の側近であり、母恵信尼の父三善為教（則）の主人兼実の政敵通親の子でもある通光に、何故覚信尼は仕えたのか。逆に言えば、通光は、そんな出自の覚信尼を何故仕えさせたのか。更には、親鸞聖人が何故それを許したのか。聖人は、ただ『教行信証』の承元の法難の記事に、秘匿されるべき諱を「太上天皇　諱尊成」と明記し、法難から三十五年後、隠岐で亡くなって三年後の一二四二（仁治三）年の二度目の追号を、「号後鳥羽院」とそこに補記することを忘れてはいない。

定例法座・法話（午後1時から）　○4月21日(土)…夏野了氏　○4月27日(金)…大町慶華輪番　○4月28日(土)…櫻居和彦氏　○5月1日(火)…日野益良氏　○5月11日(金)…大町慶華輪番　○5月13日(日)…上田紀行氏

中学生・高校生のつどい開催

3月27日（火）～28日（水）、高山別院を会場に「中学生・高校生のつどい」が開催されました。

「僕たちが、本当に求めていること」をテーマとし、講師の旭野康裕氏（益田組永養寺住職）にお話しをいただきました。旭野氏は「日頃の生活の中で、私たちはお互いに比べ合い、順番をつけている。しかし、その順番で自分が決まってしまうのだろうか。私たちは、一人一人違う個性を持っている。その個性はお互い比べようがないものではないだろうか。本当はお互いの個性を尊重し合える関係を求めているのではないだろうか。自分たちが本当に求めていることは一体何だろう」という問題提起をされ、その後の座談会でそれぞれ日頃感じていることなどを語り合いました。

また、最初は見知らぬ同士で参加した子たちが仲良くなり、和気あいあいと充実した2日間を過ごしました。

白川組真宗公開講座

期日　5月15日（火）
時間　午後7時30分から
会場　法蓮寺（白川村鳩谷）
講師　江馬　雅人 氏（益田組賢智寺）
講題　「浄土真宗は出遇いの教え
　　－念佛者との出遇い－」
参加費　500円

公開講座 現代と真宗

原発は差別で動く

ジャーナリストの視点から原発について考える

講師 西村 秀樹（にしむら ひでき）氏

1951年、名古屋市生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業、毎日放送入社。おもに報道局社会部、経済部で放送記者を務める。現職は近畿大学人権問題研究所 客員教授。

日時 2012年5月18日(金)
午後7時～9時30分
会場 高山別院御坊会館
入場無料

高山一組同朋会運動 50周年記念大会

これからの仏教

－同朋会運動50年、今ここからの出発－

講演 上田 紀行（うえだ のりゆき）氏

東京工業大学教授。文化人類学者、医学博士。
日本仏教再生に向けての運動に取り組む。
2006年ダライ・ラマ14世と対談を行う。

日時 2012年5月13日(日)
午後1時～4時30分（受付 午後12時）
会場 高山別院庫裡ホール
入場無料
一般聴講歓迎